

日清戦争観の国際比較

—日中における歴史教育を中心に—

李 穎

Abstract

China, Japan and South Korea, as neighboring countries in East Asia, have great differences in their attitudes towards history because of the differences in their education of history. Focusing on the Sino-Japanese War of 1894-1895, which decisively influenced the fate of the three countries, this paper makes a contrastive study of the middle school textbooks and teaching practices in the three countries, aiming to reveal the differences and their causes in the three countries. Last, this paper proposes some solutions to the reform of history education.

キーワード……日清戦争 歴史教育 歴史認識

はじめに

「日清戦争」は、中国にとっては中国の半植民地化を加速させる要因であった。一方、日本にとっては、日清戦争は「富国強兵」をスローガンとした明治政府の「試金石」的な出来事であり、この戦争に勝利したことで日本人の中国観、朝鮮観が大きく転換した。そして、帝国主義列強の一員となる道を拓き、戦争利益を求めて軍国主義の道を進んでいく契機ともなった。日清戦争は日本と中国の命運を決めただけに止まらず、朝鮮、台湾の植民地化という東アジア史上の大きな出来事の源流ともなった。しかし、この東アジア近代史上大きな意味を持つ「日清戦争」に関して、日中韓三国は歴史観において大きな隔たりが存在している。近代における不幸な戦争の歴史と歴史観の違いは、国際間の文化交流に跨る大きな壁となってきた。その原因の一つは、歴史教育の相違にあると言われている。

歴史教育は、児童、生徒たちに過去の歴史的事実についての知識を与えると同時に、その知識を通じて、彼らが現在と将来において価値判断と認識能力が得られるようにするためのものである。未来は歴史の積み重ねであり、歴史問題に対する認識や態度は、個々の生徒の将来の世界観、人生観、価値観の形成と密接に関係している。本論では、この近代史上重要な戦争「日清戦争」の部分を取り上げ、日中韓の中学校の教科書と日中両学校の教育の実例を中心に国際比較を行い、近代史をどのように認識して教育しているかを比較し、分析を行うこととする。

歴史教育の観点から日清戦争観を検討する研究については、中塚明、大谷正などの歴史学者によるもの、また岩田一彦、木全清博などの教育学者による成果がある。さらに、本稿と同傾

向の研究として、張秀蘭・那仁満都拉の「中日両国の高校歴史教科書の比較研究」なども存在する。しかし、「日清戦争」について、教科書分析にとどまらず、教育現場の授業実例を考察し、国際比較をおこなった研究は多くはない。「日清戦争」に関する歴史教育の国際比較が、国際理解教育の深化に少しでも資することがあれば幸いである。本稿で使用した授業の実例は 2004 年のものであり、やや古いものであることは否めないが、特に中国側において、その後の教育内容、また教育環境が大きく変わったため、この実例は定点観測として一定の意味を持っていると考える次第である。読者のご海容とご叱正をお願いしたいと真摯に考えるところである。

1 「日清戦争」の教科書比較

本節では、「日清戦争」について、実際の授業で使用される日本、中国と韓国の歴史教科書を項目ごとに比較し、深く考察していきたい。この近代史上大きな意味を持つ「日清戦争」は日中韓三国の歴史教科書ではどのように述べられているのか、それぞれ捉える角度を注目しながら比べていきたい。

表 1. 日本、中国と韓国の歴史教科書比較

項目	日本の教科書	中国の教科書	韓国の教科書
書名	中学校社会 歴史的分野	九年制義務教育八年級上冊 中国歴史	国定韓国中学校国史教科書
出版 発行	大阪書籍 2002 年（平成 14 年 2 月）	人民教育出版社 2002 年 12 月	国史編纂委員会・一種図書研 究開発委員会 1997 年 3 月
戦争 呼称	日清戦争	甲午中日戦争	清日戦争
表 題	日清・日露戦争とアジアの 情勢	甲午中日戦争と民族危機の加速	東学農民運動
相 関 見 出 し	<ul style="list-style-type: none"> ● アジア・アフリカの植民地化 ● 日清戦争 ● 下関条約と三国干渉 ● 帝国主義諸国に分割される中国 	<ul style="list-style-type: none"> ● 甲午中日戦争 ● 中日「馬関条約」 ● 帝国主義経済侵略の加速と分割狂瀾 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外勢の浸透 ● 防毅令 ● 東学の成長 ● 東学農民運動の展開 ● 執綱所の設置
写 真 地 図	<ul style="list-style-type: none"> ● 日清戦争海戦図 ● 日本軍の進路と主な戦場 ● 下関で議和会議に臨む日清両国の代表 	<ul style="list-style-type: none"> ● 甲午中日戦争形勢示意図 ● 鄧世昌と左宝贵写真 ● 旅順人民を虐殺する日本軍 ● 分割された中国の時局 ● 1898 年“新界”租界指示図 	<ul style="list-style-type: none"> ● 巨文島事件とロシアの南下地図 ● 沙鉢通文 ● 黄土岬戦跡地 ● 逮捕、押送される全瑋準

<p>挿入 され てい る資 料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 20世紀初めの世界 ● 日本と清の宣戦布告文 ● 賠償金の使い道 	<ul style="list-style-type: none"> ● 左宝貴の平壤抵抗 ● 鄧世昌の紹介 ● 旅順の“万忠碑” ● 帝国主義国家中国分割簡表 ● 中国で開設した帝国主義国家の銀行 	<ul style="list-style-type: none"> ● 開港後の対日貿易グラフ ● 公州牛金峙の戦闘 ● 東学農民軍慰霊塔
<p>問い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝国主義諸国によって、アジアやアフリカはどんな状況になったのだろう。 ● 日清戦争はなぜ起こり、どんな結果におわったのだろう。 ● 清との戦争でなぜ、朝鮮が戦場になっているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 戦争の原因は何だろう。具体の経過はどうだった？ ● 帝国主義はどのように中国を分割したのか。 ● なぜ「馬関条約」によって中国の半植民地状況が加深されたというのか。 ● 「馬関条約」で許される工場開設は改革開放の外国投資との違いは何だろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「江華島条約」以後、日本の経済的浸透と農村経済への打撃は何だろう。 ● 東学農民運動で農民が主張した内容は何だろう。 ● 東学農民運動は国内外にどんな影響をおよぼしたか。
<p>(本文記述) 戦争背景</p>	<p>日本が朝鮮と不平等条約を結んだ後、日本の商人が朝鮮の米や金を安く買い入れ、綿製品を高く売りました。</p> <p>そのため、朝鮮では食料が不足するなどの混乱が深まりました。その上朝鮮政府が財政赤字を補うために税を重くしたので、民衆の生活は苦しくなりました。</p>	<p>1894年、朝鮮では東学農民一揆が起こった。</p> <p>注：東学は東学党、東学教徒をさす。19世紀60年代朝鮮南部で流行った宗教、反政府、反侵略の特徴を持っている。</p>	<p>清と日本の商人たちが争って浸透し、朝鮮の農村社会はいっそう疲弊した。特に日本商人はイギリス産綿製品と日本で生産した日用品を持ち込んで高い値段で売り、米や大豆などの穀物と金また牛皮を安い価格で買い取った。</p> <p>日本商人は農村のあちこちで米を買いあさったので、わが国の農村では米が不足して農村の生活が困難となった。そこで、咸鏡道と黄海道などでは、地方官が穀物流出を禁止する『防穀令』を出した。すると、日本政府は防穀令の実施に手続き上の問題があると言いがかりをつけ、朝鮮政府に賠償を強要した。</p> <p>こうした状況からわが国の農民たちは日本の経済的侵略に強い反感を持つようになり、次第に日本を排斥する機運が広がっていった。</p> <p>また、こうした雰囲気から、政府と腐敗した官吏に対する不満も大きくなり、農民の間では、少しずつ政治の改革を主張する動きが現れ始めた。</p>

<p>（本文記述） 戦争原因</p>	<p>1894年、東学を信じる人々が農民と結び、外国勢力の追放と政治改革をめぐり兵をあげました。朝鮮政府が清に出兵を求めると、戦争の準備をしていた日本も清との条約を理由に朝鮮に出兵しました。</p> <p>農民軍は外国の干渉を避けるために、政治改革を条件に政府と休戦し、朝鮮政府も日清両軍に引き上げを要求しましたが、両軍は聞き入れませんでした。日本はイギリスの支持を期待し、朝鮮から清の勢力を除こうとして戦争を始めました。</p> <p>注： 1 朝鮮の民間信仰を元にした宗教団体で、西学（キリスト教）に反対しました。 2 朝鮮を巡っては1885年に、日清両国が朝鮮に出兵する場合は事前に通知し合うなどの内容の条約が結ばれていました。</p>	<p>1894年、朝鮮では東学農民一揆が起こった。朝鮮国王が清政府に出兵を求めた。日本も機に乗じて朝鮮に軍隊を送った。朝鮮の内乱が鎮まった後、日本はさらに兵員を増派し、中日戦争を挑発しようとした。</p> <p>1894年の夏、日本海軍は朝鮮の牙山口外の豊島沖で清国兵を乗せた輸送船を攻撃した。清政府は宣戦を余儀なくされ、これで甲午中日戦争が勃発した。</p> <p>注：1894年は旧暦の甲午年であるため、歴史上ではこの中日戦争は「甲午中日戦争」と呼ばれる。</p>	<p>東学農民軍は各地で官軍を退け北上し、ついに全州を占領した。こうした東学農民軍の勢力が次第に大きくなると、これを鎮圧する自信をなくした朝鮮政府は、清に軍隊を派遣してくれるように要請した。清が軍隊を派遣すると、日本も朝鮮国内の日本人を保護する口実で軍隊を派遣した。</p> <p>一方、政府は農民軍と妥協を進めた。そこで、農民軍は政府が改革を実施するという約束を承諾し、全州から撤収した。</p> <p>この時、日本軍が景福宮に侵入し、国王を威嚇する侵略行為を犯した。そこで、東学農民軍は日本の侵略を食い止めるために再度立ち上がった。しかし、北上した東学農民軍は優秀な武器を持った日本軍と官軍に公州牛金峙の戦いで敗退し、全瑋準などの指導者が捕らえられたことで農民軍の蜂起は結局失敗してしまっ</p> <p>東学農民運動をきっかけに軍隊を派遣した日本は、この機会に侵略の足がかりを得ようと武力によって朝鮮政府を脅かして内政改革を要求し、清日戦争を挑発した。</p>
<p>（本文記述） 戦争経過</p>		<p>日本軍は平壤を包囲して攻撃した。清軍回族将領左宝贵は清軍を率いて必死に抵抗し、砲撃にうたれ犠牲となった。清統帥葉志超は棄城逃走し、平壤は陥落した。</p> <p>爾後、作戦は黄海へと移った。北洋艦隊と日本の艦隊は黄海で激突し、北洋艦隊は奮戦により日本軍に重大な損害を与えた。「致远」は弾薬が不足し、管帯鄧世昌は馬力を補って敵艦にぶち当てよと命令した。しかし、不幸にも水雷が命中し、将兵全体が壮烈な最期を遂げた。この戦いで北洋艦隊は大きな損害を受けたものの、主力は残されていた。しかし、李鴻章の命令により北洋艦隊は威海衛軍港に閉じ込められ、外海での作戦を許されなかった。</p>	

		<p>平壤戦役後、日本軍は二手に分かれ中国に攻め入った。一本は鴨緑江を渡り、九連城を攻撃した。もう一本は大連、旅順に攻撃した。大連の守軍は抵抗することなく逃走した。旅順は総司令官徐邦道の軍隊のみ頑強に抵抗していた。大連、旅順は相次いで占領された。日本軍は旅順で野蛮に在住民を虐殺した。</p> <p>1895年初頭、日本海軍は威海衛を攻撃し、北洋艦隊は腹背からの攻撃を受け壊滅された。水師提督丁汝昌は死んでも投降しないと自決した。</p>	
<p>(本文記述) 戦争結果</p>	<p>議和会議で結ばれた下関条約では、清は朝鮮の独立を認めること、遼東半島、台湾などを譲ること、巨額の賠償金を支払うこと、清が欧米諸国と結んでいた不平等条約を日本と結ぶことなどがきめられました。</p> <p>日清戦争に勝つと、日本人の間には中国人をさげすむ傾向が広がりました。</p>	<p>「馬関条約」の主要内容は清政府が遼東半島、台湾、澎湖列島を日本に割譲する；日本に2億両の賠償金を払うこと；中国通商口岸における日本の工場開設を許すこと；沙市、重慶、蘇州、杭州の4港を開港することなどである。「馬関条約」の締結は中国の半植民化の度を加速させた。</p>	<p>近代国家への発展を目指す改革の動きは、甲午改革として現れた。しかし清日戦争で勝利した日本の干渉と浸透は自主的な近代化を妨げた。こうして日本の侵略に対抗し、自主国家へ発展しようとする国民の意志が高まっていた。</p>

(出典) 教科書内容に基づいて筆者作成

以上の比較から見ると、同じ歴史事件に対し、三国の教科書はそれぞれ異なる視点から記述している。その違いを項目ごとに挙げれば次の通りである。

(1) 日清戦争の呼称について

日本の教科書は「日清戦争」、中国は「甲午中日戦争」、韓国は「清日戦争」と呼ぶ。日本と中国は自国史を中心とした呼び方であるが、当時の朝鮮は、清を宗主国と仰ぐ藩属国としての歴史の経緯があるので、「清日戦争」の呼称を用いた。

(2) 表題と対応する見出し内容

韓国の教科書では「日清戦争」という項目がない。「外勢の浸透」「防穀令」「東学の成長」「東学農民運動の展開」になっており、「東学農民運動」を中心に歴史事象を記述している。中国の教科書は「甲午中日戦争」、「中日『馬関条約』」、「帝国主義経済侵略の加速と分割狂瀾」の三つの内容から、戦争に敗れたことによって中国の半植民地化が一層進んだことに重点が置かれている。それに対し、日本の教科書は「当時のアジア、アフリカの植民地化」「日清戦争」「下関条約と三国干渉」「帝国主義諸国に分割される中国」の項目があり、欧米列強によるアジア・アフリカの植民地化という世界情勢の下に「日清戦争」を位置づけている。

(3) 地図について

三国とも同じ朝鮮半島の地図を掲載している。韓国教科書の地図は、日清戦争以前における外国勢力の朝鮮浸透を示すものである。日本と中国教科書の地図は、日清戦争の戦場や陸海軍の進路を示すものである。日本の教科書は朝鮮を中心とした地図を使っているのに対し、中国の教科書は中国黄海、渤海を中心とした地図を使っている。日本の教科書の地図は「日本軍の進路、日本艦隊の進路、清国艦隊の進路、主な戦場」を示している。中国教科書の地図はその上に「日本軍進攻の方向」と「清軍反撃の方向」を表記している。主な戦場については、中国の教科書の地図では中国国内の戦場が多く示しているのに対し、日本の教科書の地図では朝鮮国内の戦場が多い。旅順が戦場になったことは、中国の教科書の地図では示されているが、日本の教科書の地図では示されていない。

(4) 挿入した資料

挿入した資料を見ると、韓国も中国の教科書も、侵略に抵抗する戦闘描写と民族の英雄を賞讃するものが多い。日本の教科書の資料では世界的な背景と戦争の結果を説明するものが多い。

(5) 「東学農民運動」の内容について

韓国側の教科書は、東学農民運動を中心とした内容構成となっている。「日清戦争」は朝鮮半島で勃発した戦争なので、農民運動の原因、経過と結果は「日清戦争」の大きな背景といえる。例えば、農民一揆の原因は、「わが国の農民たちは日本の経済的侵略に強い反感を持つようになり、次第に日本を排斥する機運が広がっていった。また、こうした雰囲気から、政府と腐敗した官吏に対する不満も大きくなり、農民の間では、少しずつ政治の改革を主張する動きが現れ始めた」と書かれている。経過としては、「この時、日本軍が景福宮に侵入し、国王を威嚇する侵略行為を犯した。そこで、東学農民軍は日本の侵略を食い止めるために再度立ち上がった。しかし、北上した東学農民軍は優秀な武器を持った日本軍と官軍に公州牛金峙の戦闘で敗退し、全瑛準などの指導者が捕らえられたことで農民軍の蜂起は結局失敗してしまった」とある。結果に関しては、「清日戦争で勝利した日本の干渉と浸透は自主的な近代化を妨げた。こうして日本の侵略に対抗し、自主国家へ発展しようとする国民の意志が高まっていた」として、東学農民運動は日本の侵略に抵抗するためのものとされている。以上の内容に対し、日本側の教科書では、朝鮮の国内事情に関する記述はあったものの、記述内容は至って簡単で、「東学を信じる人々が農民と結び、外国勢力の追放と政治改革をめざして兵をあげました」という程度である。どの外国が「外国勢力」なのか曖昧にされた。この表現は、矛先を日本の経済と軍事侵略に向けた韓国の認識と大きく違ってくる。中国側の教科書に至っては、朝鮮の農民運動「1894年、朝鮮では東学農民運動が起こった」の一語で片付けられ、事件の経緯に関する記述は皆無であった。日清戦争で日本軍と戦った相手は清の軍隊ばかりではない。豊島沖海戦の2日前、日本軍はソウルの王宮を攻撃、朝鮮軍と戦闘を交えて占領した。自国中心とした歴史記述なので他国で起こった「日韓戦争」を割愛したのである。

(6) 出兵の経過と戦争の起因について

日本側の教科書は「朝鮮政府が清に出兵を求めると、戦争の準備をしていた日本も清との条約を理由に朝鮮に出兵しました」と書かれている。その「清との条約」とは『天津条約』を指しているはずである。『天津条約』では「通知し合う」の文が書かれてあるが、「共同出兵」までは約束していない。韓国の教科書では「鎮圧の自信をなくした朝鮮政府は、清に軍隊を派遣してくれるよう要請した。清が軍隊を派遣すると、日本も朝鮮国内の日本人を保護するという口実で軍隊を派遣した」とあり、出兵の口実が日本の教科書と異なっている。中国側の教科書では、「1894年、朝鮮では東学農民一揆が起こった。朝鮮国王が清政府に出兵を求めた。日本も機に乗じて朝鮮に軍隊を送った」とされ、日本の出兵理由について書かれていない。2001年版『中国歴史教師用書』では、歴史学者蔣延黻の分析が載せられていた。それは、「東学党の乱の地はソウルからは遠く、しかも在住日本人は少なかった。清政府は直隸提督葉志超の率いる1500名の淮軍を海路で派遣し、朝鮮の牙山に上陸した後、日本は8000余名の兵力を朝鮮に派遣し、漢城一帯の重要地点に分散して駐屯した。東学党の乱を鎮めるより、朝鮮の首都ソウルを占領しようとするのがその本音である」と分析している。

戦争の起因については、日本側の教科書は「朝鮮政府は日清両軍に引き上げを要求しましたが、両軍は聞き入れませんでした」と記述している。これは、日中両国による朝鮮争奪のための戦争であるとの印象を強めている。中国側の教科書は「日本海軍は朝鮮の牙山口外の豊島沖で清国兵を乗せた輸送船を攻撃した」と書かれ、豊島攻撃で700名の清国兵が戦死したことを戦争の端緒としている。韓国の教科書は「国王を威嚇する侵略行為を犯した」、「朝鮮政府を脅かして内政改革を要求し、清日戦争を挑発した」との記述があり、王宮の占領と国王を威嚇することは侵略行為であることを訴え、日本軍による「挑発」的な戦争の側面を強調している。日本側の教科書は「日本は朝鮮から清の勢力を除こうとして戦争を始めました」ことに対して、中国側の教科書は日本の侵略行為を責めている。

(7) 戦争の経過について

戦争の経過についての記述は、中国側の教科書が最も具体的である。日清戦争の海陸戦争場面と人物の描写や情景が目につくほどである。黄海海戦の英雄鄧世昌を賞賛したのは学校の指導要領（「教育大綱」）に基づき、「愛国主義」教育を歴史教育の到達目標の一つとしたからである。しかし、朝鮮軍国内の抵抗についての記述は欠けている。一方、日本側の教科書は戦争経過に関する記述が一言も書かれていない。

(8) 「下関条約」について

「下関条約」の主な内容について韓国側の教科書は記載がないのに対し、中国側の教科書では詳しく記載し、中国の半殖民地化を加速させる要因とされた。それに対し、日本側は勝利による日本の国際地位の向上という認識が継続している。そして、日本の教科書に載せられている「清は朝鮮の独立を認める」という条文は、中国の教科書には載せられていなかった。これ

は、朝鮮の独立は名ばかりであるとの中国側の認識を示している。一方、日清戦争は「日本が清の勢力を取り除き、朝鮮の独立を支援した戦争である」、「日本にとって利益線を守った」などという認識が、現代の日本社会では根強く残っている。

以上の教科書内容について、戦争のきっかけは朝鮮の農民運動、両国の朝鮮出兵、日本の朝鮮占領、日本が戦争を厭わない姿勢と戦争の勝利、下関条約の締結、日本の戦争利益の獲得、日本勢力の拡張など、事件内容は表面的に記述の大差がない。しかし、韓国側の教科書は自国の農民戦争を中心として展開し、侵略勢力に対抗する強烈な民族的自覚と近代意識の高まりに叙述の重点を置いており、日清戦争そのものを正面から取り上げていなかった。中国の教科書は戦争の経過と結果について詳しく説明している。民族英雄を賞讃し、侵略に対する民族的抵抗が中心とされた。中・韓国両国の教科書は「日本の侵略」行為に対する民族的な抵抗に重点が置かれていることに対し、日本の教科書は簡略な内容叙述が特徴であり、朝鮮の『防毅令』、景福宮の侵入、旅順での虐殺も触れていない。戦争全体の評価に関しては「侵略」という表現は皆無であった。三国とも自国が「主体」、他国は「客体」として考える自国中心主義の立場から歴史を論じており、「自国」に関する出来事しか書かれていない。そして、加害者側では侵略や虐殺などの自国にマイナスとなる歴史的事象は割愛され、被害者側では多くの紙幅が割かれている。

2 「日清戦争」に関する授業実例の国際比較

2-1 「日清戦争」に関する授業実例 1（日本側）

日中両国の学校では「日清戦争」をどのように教えているのかについて、日本の滋賀大学教育学部附属中学校と中国天津微山路中学校の授業記録から分析してみよう。

<日時> 2004年12月3日 第2時限

<場所> 滋賀大学教育学部附属中学校

<学級> 2年C組

<担当教員> 女性 20代

表2. 「日清戦争」に関する授業実例 1（日本側）

	教師の活動（指導・支援・発問など）	生徒の活動（聴講・応答など）
導入	今日は日清戦争について勉強します。プリントを見てください。日清戦争は小学校の頃に勉強したことがあると思いますが、思い出してみましよう。まず、このビゴーの風刺画を見ましよう。この絵はどんなことを意味しているのでしょうか書いてください。何も見ずに予想して書いてください。	
1	ビゴーはフランス人です。その彼が当時の東アジアの状況を描いたものです。彼は何が言いたかったのでしょうか。今日は12月3日だから出席番号15番の人、答えてください。	生徒A:日本と中国が朝鮮を奪い合っている。そして、ロシアも横取りを企んで狙

2	なるほど、このビゴアの絵の左側のチョンマゲの人は日本人ですね。右の帽子の人は中国人ですね。朝鮮は？	っている。 生徒 B:魚です。
3	魚ですね。どっちが釣りそうですか。	
4	どうしてそう思いますか？	生徒 B:中国が釣りそうです。 生徒 C:中国が餌をまいているから、釣りそう。
5	確かに魚が中国に向いていますね。ビゴアは、朝鮮を巡る争いは、中国が有利だと見たのですね。魚である朝鮮が、中国の方に向いていると考えて描いたのですね。ここまで、整理できますか。 (板書) ビゴアからみたら中国が有利	生徒 D:魚が中国に向いている。
6	一言でいうと：日本と中国が朝鮮を狙っている。	
展開	その時、狙われた朝鮮の国内の様子というとな何が起こっていたか。何が勃発したか。先生が黒板に書きます。まず写真の横に書いて、説明します。 (板書) 朝鮮農民戦争が勃発した。 (板書) 1894年、朝鮮で起こった農民抵抗、東学を信仰する人を中心に外国勢力の排斥、雑税の廃止などを求め、朝鮮全域に波及した闘争 東学は西学(キリスト教)に対抗しようとする朝鮮の民間宗教	
1	だいたい書けましたか。教科書 139 ページを開いてください。当時、西欧諸国はアジアで勢力を広げていました。朝鮮半島でも外国の勢力の影響と雑税で農民は生活が苦しい、農民は外国の勢力を排除してくれと政府に対する闘争をはじめました。	教科書を各自で調べる。
2	次の話は大事なものですが、その後、朝鮮は (板書) 朝鮮政府は?清に援軍を頼む 援軍のことを置いといて、朝鮮内部は (板書) 事大党と独立党の対立がある	
3	プリントの左側を見てみましょう。奥に乗っているのはリーダーの全捧準です。その下の対立には事大党と独立党を書いてください。	
4	事大党は清と親子のような関係を保ち、中国と仲良くしていこうと主張していた。独立党は日本をモデルにしたいという考え方で、この2つの党は対立していた。	
5	話は戻ります、日清戦争は日本と中国の戦争です。プリントの右側を読んでください。どんな戦いが起こっても、開戦するときは必ず宣戦布告というものがありますが、それをプリントに載せてあります。大切なところに赤線を引きながら読んでみましょう。	日本の天皇と清の皇帝による宣戦布告文を読む
6	清と日本が、それぞれ出兵する理由として何と書かれていますか。 (板書) 清—日本は理由なく朝鮮に出兵した。清は援助を求められた。 日本—朝鮮は独立した国であり、清は平和を乱している。平和を守るための出兵	生徒 E: 清は日本が理由なく出兵したと言っている。清は朝鮮と親子関係なので助けてくれと頼まれたから出兵した。 生徒 F: 日本が出兵するのは、朝鮮が清の属国ではなく、独立国なのだ。清は朝鮮半島の平和を乱そうとしている。
7	ここまで分かりましたか、教科書 130 ページを開いてください。左上の地図を見てください。何か気が付いたことがありますか。特に戦場については？ (板書) 戦場が朝鮮半島	生徒 G: 戦場が朝鮮半島に集中している。

8	日本と清との戦争が朝鮮半島で行われたのは、両国が朝鮮半島を狙って起こった戦争だからです。 （板書）開戦は朝鮮の平和維持や援助という理由	
9	実は戦場は、朝鮮半島を越えて清まで出ていたね。 戦争の結果はどうなったか、書いてください。 （板書）日本は勝利	
10	日本は勝った。日本は勝利。なんで勝ったかという、日本は明治維新後、徴兵制を取りました。清より軍が優れていた。清は国内が不統一でばらばらだったからです。	
11	次の数字を見てください。 （板書）この戦争で死んだ人 13488 人 戦死 1417 人 病死 11894 人	
12	なぜ、病死の人がこんなに多いだろう。実は （板書）初めての対外戦争 初めての対外戦争だから、日本国内での戦いと条件が違うからです。国内戦争と同じように食べ物や水などの物資を現地で調達する計画でしたが、現地の気候や水が合わずに多くの兵士が体調を崩してしまっただけです。	
まとめ	この戦争は日本が勝利。プリントの下側に 1894 年戦争終結。矢印のある所に日本の勝利を書いてください。勝ったらどうするか。戦争が終わったら必ず何か話し合いがあります。それは議和会議と言います。次の時間でその議和会議について説明します。日清戦争の年代を書いておいてください。 （板書）年代 1894 年 日本勝利	

（出典）筆者の記録により作成

<授業事例について考察>

(1)この授業では、教師側自作プリントに、ビゴアの「漁夫の利」、東学党の首領であった全琫準の写真、日本と清の宣戦布告文、戦場地図などが載せられていた。授業中は板書し、重点となることを生徒に記録させていた。教師が分かりやすい言葉で、歴史的事象について順序よく説明していたが、知識や記憶を中心とした歴史教育といえる。

(2) フランス挿絵画家ビゴアの風刺画「漁夫の利」を授業の導入に使っていた。生徒とのやり取りを通し「中国が有利」「日本と中国が朝鮮を狙っている」という意見が得られた。ビゴアの絵を使うことは生徒にとっては親しみやすいものの、問題点も含んでいる。なぜなら、ビゴアの「漁夫の利」は当時の帝国主義的視点による弱肉強食の世界観と民族蔑視を内容に含んでいる。このビゴアの絵をもとに「日本と中国が朝鮮を狙っている」としていた展開については妥当とは言いがたい。そして、中国と韓国では、日本が西欧的な近代化政策を進めるために清を中心とする東アジア国際秩序の再編成は不可欠であり、明治維新以降の日本による朝鮮、中国に対す

る侵略政策の延長線上では日清戦争は避けられないと解釈されている。これに対し、日本では、戦争の勃発は 1880 年代から続く日清間の朝鮮を巡る攻防の歴史の延長線上にあるという認識が存在している。歴史的事象に対する異なる理解、解釈によって歴史観のギャップが生じる。

(3) 展開 1 では、「当時、西欧諸国はアジアで勢力を広げていた」こと、「朝鮮半島では外国勢力の影響と雑税で農民たちの生活が苦しく、人々は外国勢力の排除を求めて闘争を始めた」と述べられたが、かなり簡略化されたといえる。その外国勢力とはどこの国を指しているのか、朝鮮半島にどんな影響を与えたのか、朝鮮の農民はなぜ外国勢力を排除しようとしたのかについて説明はなかった。

(4) 展開 6 では、清と日本の宣戦布告文を比較させていた。「清は援助を求められた」、「日本は平和を守るための出兵だ」と、双方とも出兵の理由があったという認識であったが、本当に日清戦争の勝利により、朝鮮は平和と独立へと向かったのか。歴史資料に関連してさらに深く展開できると考えられる。

(5) 展開 8 では、生徒に戦場を調べさせていたが、戦場と主要戦闘は半分以上中国国内にあるとの説明がなかった。展開 9 では、教師は「実は、戦場は朝鮮半島を越えて清に入っていたね」と述べた。これでは成り行きで自然に越境したという印象を生徒に与えてしまう。そして、「日本と清との戦争が朝鮮半島で行われたのは、両国が朝鮮半島を狙って起こった戦争だからです」との教師の説明から、戦争に対する教師自身の認識が示されている。

(6) 展開 10 では、戦争に勝利した原因として、日本が徴兵制を採用していたこと、軍隊の近代化などのことを挙げていた。徴兵制はいいものなのか。徴兵されて死んでいった多くの兵士は、貧しい農民と下層の労働者ということからすれば、一部の権力者による戦争は、一般民衆にとっては多大な災厄であったことは紛れもない事実であろう。

(7) 展開 11 と 12 では、日本軍の戦病死者と戦死者の数字に焦点を当て、「日本にとって初めての対外戦争だから」と説明していた。病死者が戦死者より多かったのは、外国の風土について知識がなく対応できない、充分準備していなかった、初めての対外戦争だからである。自国の病死と戦死の下層兵士に目を向けたが、戦争の辛酸を嘗め尽くした中国と韓国の被害者の感情に目もくれていない。

(8) 展開 10 とまとめでは、日本の勝利を強調していた。戦争の成敗を持って締め括った。戦争は一体いいものだろうか。誇りに思えるものだろうか。考えさせる時間を残していなかった。

日本文部省平成 10 年 12 月『中学校学習指導要領』社会科歴史の分野では「近現代の日本と世界」の内容目標は「急速に近代化を進めたわが国の国際的地位の向上と大陸との関係のあらましを、自由民権運動と大日本帝国憲法の制定、日清、日露戦争、条約改正を通して理解させる」と書かれている。日清戦争を「国際的地位の向上」に位置づける一方、戦争の侵略性が曖昧にされた。福沢諭吉はこの戦争を「文明と野蛮の戦い」であり、「われは文明開進のために戦うもの」といって「義戦」とみなしていた。また、多くの人も「朝鮮に独立国の権威」を持たせ

るために起こった戦争だと信じていた。しかし、「文明の皮膚を被った野蛮な怪獣である日本」と世界に報道された「旅順の虐殺」は、この授業では触れられていなかった。戦争による被害と加害の内容に少しでも多く触れて、戦争に対し、生徒の一層多面的な思考を促してみればどうかと思われる。

2-2 「日清戦争」に関する授業実例 2（中国側）

日本の滋賀大学教育学部附属中学校の授業は、日本の授業例の一つの教育パターンとして紹介した。中国の学校では、「日清戦争」どのように教えているのか、中国天津市微山路中学校の授業記録から考察してみたい。

<日時> 2004年9月25日 第2時限

<場所> 中国天津市微山路中学校 108教室

<学級> 初一8班

<担当教員> 女性 30代

表3. 「日清戦争」に関する授業実例 2（中国側）

	教師の活動（指導・支援・発問など）	生徒の活動（聴講・応答など）
導入	先週では「中国辺疆の危機と中仏戦争」を勉強しました。中仏戦争の結局はどうでしたか、話してください。	生徒 A: 中仏戦争では清軍が鎮南関で大勝利をとりました。しかし、清政府は「乗勝即収」の原則で、フランスと和を求め、「中仏新約」を結びました。中国は「不敗の敗」という局面になりました。
1	そうですね。「不敗の敗」は考えてもおかしいですね。西太后たちの思惑はベトナムが北京に遠いし、清の統治に影響を与えないから、早く戦争を終わらせようとなりました。人民のことを全然考えてくれなかったです。清政府の腐敗と無能が余すところなく暴露されましたね。中仏戦争に続いて、帝国主義諸国は先を争って中国に勢力を拡張し、明治維新後の日本もその行列に加えました。	
2	「洋務運動」は頑固派の反対で失敗しました。中国は富強の道に進めなかったです。かえって、隣国の日本は明治維新の一連の改革によって、一躍に資本主義の新興国になりました。資本主義発展のための原料と市場のために拡張性が強いです。1874年に、日本はわが国のどの地域を侵略しましたか。	生徒 B: 台湾です。
3	はい、台湾を占領する陰謀は実現できなかったが、清から50万両の賠償金をもらいました。この利益の獲得は侵略者の野心を助長した。日本は国家財政の60%を軍備に使い、朝鮮、台湾、中国東北を侵略する「大陸戦略」を立てました。今度、矛先を朝鮮に指しましたよ。1876年から日本は朝鮮と不平等条約を結び、朝鮮に経済、政治面で浸透するだけでなく、1894年に朝鮮を併呑、中国を侵略する「甲午中日戦争」を挑発しました。	
4	(板書)	

<p>展開 1</p>	<p>第 12 課 甲午中日戦争と民族危機の加深 一、甲午中日戦争 1. 甲午中日戦争の勃発 皆さんは予習したと思いますが、その起因について説明してください。</p> <p>C さんの説明の通りです。1894 年、朝鮮国内では東学農民一揆が起きました。朝鮮の封建君主李熙がそれを鎮圧する自信がなく、清に援兵を頼みました。清と朝鮮は「宗藩関係」なので、朝鮮政府を保護する義務を果たすのに出兵を決めました。そして、「天津条約」の約束の通りに日本に照会してから朝鮮に兵を送ったのです。しかし、日本は何の理由もなく動き始め、朝鮮の都ソウルに大軍を送りました。やがて、朝鮮の農民一揆が鎮まり、清は日本に共同で撤兵を建議しましたが、日本は引き上げないばかりか、朝鮮王宮を占領し、さらに清軍の輸送船を攻撃しました。清軍は 700 人死亡になったのです。清は余儀なく日本に宣戦しました。この年は旧暦の甲午年だから、戦争は「甲午中日戦争」と言われています。</p> <p>日本は朝鮮の都を占領し、朝鮮王宮に侵入した侵略行為を犯しました。さらに、突如清軍を攻撃し、「甲午中日戦争」を挑発しました。</p>	<p>生徒 C:1894 年、朝鮮では農民一揆が起きました。朝鮮国王が清政府に出兵を求めましたが、日本も機に乗じて朝鮮に軍隊を送りました。朝鮮の内乱が鎮まった後、日本はさらに兵員を増派し、清日戦争を挑発しようとしてしました。</p>
<p>2</p>	<p>次に、戦役について紹介します。主要な戦役について黒板に書きます。 (板書)</p> <p>2. 主要な戦役 平壤戦役 黄海海戦 旅順戦役 威海衛戦役</p>	
<p>3</p>	<p>重要な戦役はいくつありますか。黄海海戦を中心に勉強しましょう。教科書の 61 ページを開いてください。D さん教科書を読んでください。</p>	<p>生徒 D:教科書を読む。</p>
<p>4</p>	<p>PPT で「甲午中日戦争形勢図」を見せる。「黄海海戦の軍備対比表」を見せる。グラフから見れば、当時の北洋艦隊の実力は弱くないですね、黄海海戦で大きな損害を受けましたが、また戦える。なぜ結局、全軍壊滅になったのかについて、話してみましよう。</p>	
<p>5</p>	<p>皆さん、よく考えましたね。それに、李鴻章は自分の政治資本の北洋艦隊を温存するために、「避戦保船」という戦術を避ける命令を下しました。李鴻章は軍事部門の責任者ですが、戦争準備を怠け、ひたすら欧米の調停に望みを託しました。黄海海戦後、李鴻章の命令で威海衛に中国の軍艦を閉じ込め、戦機を失ったから、全軍壊滅の結果を招いたのです。</p>	<p>生徒 E:当時、西太后が 60 歳誕生日のために、頤和園の建設に海軍の軍費も流用しました。誕生日だから外国と戦争したくないです。</p>
<p>6</p>	<p>PPT で「鄧世昌の写真」と「此日漫揮天下涙、有公足壮海軍威」の挽歌を見せる。鄧世昌のことを皆さん知っているでしょう。この挽歌を読んでください。</p> <p>はい。詩の意味は「この日には天下の人々は彼に涙を流し、海軍の威厳は彼によって示された」です。当時の</p>	<p>生徒 F:北洋艦隊の軍艦より、日本の軍艦は小さくて動きやすいです。そして戦術のほうは日本側が優れています。</p> <p>生徒 G:清「八旗子弟」の軍隊は腐敗で戦闘力がなく、戦闘で軍官は不戦逃走が多かったからです。</p>
<p></p>		<p>生徒 H:詩を読む。「甲午風雲」の映画を見たことがあります。鄧世昌は知っていま</p>

	<p>満洲貴族の八旗子弟は腐敗したし、戦闘力なくて戦場で逃げた人が多かったですが、今でも人々に賞賛されている鄧世昌のような民族英雄もいましたよ。国のために命を捧げた英雄を永遠に銘記しなくてはならないですね。皆さんも将来国家に貢献できる人材になるように、頑張ってください。</p>	<p>す。偉大な人民英雄です。</p>
7	<p>今日の宿題は、「黄海海戦」の名詞解釈です。ノートに纏めて出してください。時間、場所、人物、経過、結果と影響の順に書いてくださいね。</p>	
8	<p>PPTで「旅順の虐殺」の写真を見せる。日本軍は旅順を占領した後、1.8万の旅順人民を虐殺する暴行を犯しました。この写真は日本の「近代百年史図」に載せられたものです。ここまで、殺人を誇りに思っている侵略者の本質が分かったでしょう。</p>	
9	<p>戦争の結果は北洋海軍全軍壊滅し、清は敗戦になったのです。1895年、清政府は李鴻章を全権大臣に委任して、彼は日本の首相伊藤博文と日本の馬関で、不平等な「馬関条約」を結びました。</p>	
10	<p>(板書) 二、中日「馬関条約」 主要内容: 1. 遼東半島、台湾、澎湖列島を日本に割譲する; 2. 日本に2億両の賠償金を払う; 3. 日本が中国通商港で工場開設を許される; 4. 沙市、重慶、蘇州、杭州の4港を開港する;</p>	
11	<p>以上のように、清は日本とすごく屈辱な不平等条約「馬関条約」を結びました。これによって中国の半植民地化が一層深刻しました。なぜ半植民地化を加速したと言われるのでしょうか、皆さんはチームに分かれて、「馬関条約」の内容を「南京条約」と比べながら話し合しましょう。</p>	<p>生徒が議論し合う。</p>
12	<p>みなさん、よく比べましたね。条約の内容は殆ど覚えましたが、先生が黒板の条約について説明します。みなさんよく聞いてくださいね。 まず、遼東半島、台湾、澎湖列島の広い領土の割譲によって、日本の中国東北と東南沿海の侵略が容易になり、帝国主義諸国の中国侵略の野心を助長しました。 次に、2億両の巨額の賠償は中国人民に重い負担を与えました。それに対し、日本は巨大な戦争利益をもらい、この賠償金を殆ど軍備の拡張に使われました。軍備の拡張を進めたら、どうなりますか。 そうですね。それ以降、10年ごとに苦難なアジア人民は侵略者による戦争を被ることになりました。 そして、中国での工場開設が許可され、多くの通商都市を開放したことによって、帝国主義国家の資本輸出と富の略奪が容易になったのです。</p>	<p>生徒: 戦争。</p>
まとめ	<p>以上の内容は清政府の腐敗と無能を曝け出しました。「馬関条約」によって中国の半植民地化の程度を加速させました。 「馬関条約」をきっかけに、帝国主義諸国による中国分</p>	

<p>割が加速され、中国は未曾有の民族危機に直面していました。それに伴って、中国人民の反侵略運動と変法維新運動の機運も高まりました。</p> <p>「馬関条約」締結後、台湾人民の割譲反対の闘争が侵略者に大きな打撃を与えました。来週は「台湾軍民の反割譲闘争」と「帝国主義列強の中国分割」を勉強します。最後の5分間を利用して「甲午風雲」の映画のシーンを放映するから、見ることにしましょう。</p> <p>(ビデオ放映)。</p>	
--	--

(出典) 筆者の記録により作成

<授業実践についての考察>

- (1) ビデオや PPT を利用して日清戦争の場面を映したりした。発問、メモ、討論の場面も設けた。イメージ付きを大事にする授業であるが、知識や記憶を中心とした歴史教育といえる。
- (2) 導入 1 と 2 では前時の授業内容を復習していた。中仏戦争、洋務運動、台湾侵略、大陸政策などを取り上げ、清の腐敗と日本の侵略の意図を分析し、歴史事件の諸事項の関連性を示した。しかし、生徒の回答は抽象的で難しい、丸暗記の痕跡が残る。
- (3) 導入 3 と 4 では、日本近代資本主義国家の道について説明した。明治維新によって日本は民族危機を乗り越え、資本主義の新興国になったことを評価したが、「資本主義発展の原料と市場のために拡張性が強い」という側面に対し、強く批判する態度を取った。
- (4) 展開 2、3、4 では、戦役と戦闘の過程について教科書を活用したり、議論させたりして、北洋艦隊の全軍壊滅になった原因を分析していた。展開 5 では避戦態度を取った李鴻章を批判し、逃走した葉志超などの行動に敗因を求めた。日清戦争のほとんどの戦闘で軍上層部の敵前逃亡や軍務放棄が現れ、将軍の腐敗・無能、兵士の戦意喪失は各国の戦闘詳報にも記されている。李鴻章は軍事部門の責任者であったが、戦争準備を怠り、ひたすら欧米による調停に一縷の望みを託した。さらに、自身が指揮をとる北洋艦隊の温存を図るために「戦闘を避け、艦を温存する」など、敗戦の大きな原因だと批判されている。展開 6 では、PPT で戦役の場面と鄧世昌の写真と「此日漫揮天下淚、有公足壯海軍威」の挽歌を読ませたりした。民族英雄鄧世昌を顕彰し、「黄海海戦」が重要な学習内容として扱われた。「黄海海戦」を勉強の中心にしたのはただ戦局が決めつけられた重要な戦役だからだけではなく、必死に抵抗した英雄を賞賛するためである。2000 年国家教育委員会より公表された『全日制中学校歴史大綱』（指導要領）に基づき、中学校の歴史教育の目標と果たすべき役割として、知識の伝授、思想教育の「二大任務」を果たさなくてはならない。思想教育では、「外敵に侵略され、半植民地状態に陥った近代中国の恥辱的な歴史の学習を通し、祖国振興のために努力奮闘する児童・生徒の愛国心を培う」という近代の歴史「国恥教育」が強調されたのである。
- (5) 展開 8 では、旅順の虐殺を非難した。日清戦争について侵略者の暴行と民族抵抗に重点が置かれた。被害者側として、侵略者の暴行を忘れ難く、つよく訴えるものになっている。

- (6) 展開 9、10、11 では、生徒の議論や考えさせる時間を設けた。せっかく討論を経たものの、教科書に掲載された資料から大きく離れた回答は見られなかった。
- (7) 展開 12 では、教師より「馬関条約」について詳しく説明した。中国近代半植民地に陥る原因と日本が軍国主義に進んだことを分析した。しかし、朝鮮独立に関して何も説明がなかった。

2-3 「日清戦争」に関する授業実例の比較

日本と中国の二つの授業例を比べると、歴史認識において、授業案の作成者の教師の見解がまず大きく異なっている。顕著な相違点としては以下のように分析できる。

まず、「日清戦争」に関しては、日本側教師はビゴーの「漁夫の利」を使っていた。「日本と中国が朝鮮を狙っている」「日本と中国が朝鮮を奪い合っている」という歴史認識は明らかである。それに対し、中国側教師は「日本は朝鮮と中国を侵略した」という認識が鮮明である。日本側教師は戦争の死傷人数は病死が多いことを挙げていた。そして、「実は、戦場は朝鮮半島を越えて清に入っていた」と言う自然に越境したかのような解釈を通し、日清戦争は充分準備した侵略戦争ではないという認識を示した。それに対し、中国側は「大陸戦略」と「台湾出兵」をとりあげ、日清戦争が日本側の意図的な侵略戦争であることを明確にしている。

次に、日本の授業では、戦争の責任者が一切登場せず、戦闘についての紹介もなかった。それに対し、中国の授業では、黄海海戦を中心に戦場の状況が詳しく説明された。そして、人物の行動がそれぞれ分析し、李鴻章の責任も問われた。

それから「旅順の虐殺」については、日本の授業では触れていなかった。中国人教師は授業では PPT で写真を示しながら説明した。かつて、福沢諭吉はこの戦争を「文明と野蛮の戦い」とみなした。しかし、「文明の皮膚を被った野蛮な怪物である日本」と世界に報道された。戦争加害に関するとらえ方の違いが、加害側と被害側の意識の格差となっている。

二つの授業実践とも教師主導による詰め込み教育の範疇に入る。教師の歴史認識をそのまま生徒に与え、生徒の認識イコール教師の認識になる可能性が高い。教科書の内容を漏れなく生徒に押し付けたあげく、生徒に与えたイメージは抽象的なものとなり、丸暗記にとどまる歴史認識だといえる。歴史という過去の出来事を教える時に、一方的な考えだけ教えるのは危険である。「彼を知り、己を知る」という言葉のように、認めなくてもかまわないが、より多くの複数の視点から資料と情報を提供すべきであろう。教科書通りに説明し、考えさせる時間を作らなければ、生徒に一面的な見方しか伝わらない。客観的で多様な資料を生徒に提示し、自分の頭で考えさせ、自分なりの歴史認識を芽生えさせるのは教師の任務ではないかと思っている。

おわりに

日清戦争の原因を究明する前提として、当時の国際環境と帝国主義の発展段階を考えなくてはならない。19 世紀末期を取り巻く国際環境では、帝国主義列強は植民地の支配・獲得競争を

行っていた。資本主義発展の資本を求めるためには、弱肉強食の倫理観が氾濫していた。日本は元、封建制の国であったが、1868年から一連の資本主義的改革を行い、資本主義の道を歩み始めた。生産原料と市場を獲得するために、日本の資本家階級は積極的に対外拡張を主張した。

日本の政治家吉田松陰、西郷隆盛、山県有朋などは朝鮮、台湾、中国東北地区を分割する「征韓論」と「大陸戦略」を唱えた。福沢諭吉は日清戦争を「文明と野蛮の戦い」といって、戦争を「義戦」とみなした。内村鑑三も「朝鮮に独立国の権威を」保たせるためにおこった戦争として政府の意見を信じた。日本の侵略行為に対し、列強諸国が傍観もしくは黙認の態度をとった結果として、日本にとって侵略行為の道は広く通りやすいものとなった。戦争勝利に多くの国民が狂喜したことも事実であった。一方、当時の中国の国内状況は、「封建君主専制政治」による政治の腐敗、「アヘン戦争」による富と国土の喪失、「太平天国農民運動」の国内矛盾激化など、開戦前夜の清は封建社会崩壊寸前の状況にあった。朝鮮政府も外国勢力の侵入、民衆生活の窮乏といった問題に対処できず、国内各種の矛盾と対立も相まって、情勢は風雲急を告げる状況となっていた。近代東アジアの政治、経済発展の不均衡によって、東アジア朝貢秩序の崩壊と日本侵略勢力の拡張は一触即発の状態にあった。この火口は朝鮮で発生した東学党農民一揆であろう。

「日清戦争」の歴史観について、争論の焦点は無論、「侵略戦争」であるか否かにある。上記の教科書と授業実践からもわかるように、「日清戦争」について、それぞれ異なる歴史観を伝達している。日本では、「防衛戦争論」との認識が存在している。簡略的に言えば、朝鮮を日本にとっての「利益線」とみなし、清国が宗属関係にある朝鮮に影響を強めることは、「利益線」を危うくするため、武力行使に至ったというものである。この認識は日本と中韓両国に大きな隔たりがある。いくら「利益線」と言っても、他国国境で利益を描くのは到底成り立たないだろう。さらに、日清戦争の勝利により、清と朝鮮の間に長らく存在していた宗属関係が消滅され、朝鮮は平和と独立へと向かったという「中立国」論調も目立っている。しかし、それとともに、朝鮮王妃の殺害、旅順の虐殺事件、台湾征服など侵略と抵抗の歴史に目を閉じている。歴史に直面しようとせず、歪んだ理論を唱え続けていけば、歴史はいつの間にか幻になってしまうだろう。一方、中国側に見えるエスノセントリズム（自民中心主義）が指摘される。中国の教科書では侵略勢力に対抗する強烈な民族的自覚の「国恥教育」を出発点にしている限り、「いつやり返すか」との誤解も招く。これに対し、中国側の謹言慎行が求められるほか、時代は近代から現代の国際化時代へ進む中、戦争は国際問題を解決する手段でなくなったことを理解しなくてはならない。戦争の辛酸を嘗め尽くした民族は再び戦争をしようとするかを問い直すべきだと思われる。

教育カリキュラムや教科書について、現時点では不可避的に国家教育の規制の影響を受けている。教育政策、指導要領、教科書制度などで、教育の内容が制約されている。教科書の内容は教科書会社や執筆者の考えによって違いがあるが、大要は学習指導要領に沿ったものと考え

られる。それに引き換え、授業実践は実践者の歴史観、教育観の現れであり、指導要領を超えて深く掘り下げることができる。そのため、当面の解決すべき問題はむしろ教育指導を行う教師のほうである。

「教科書を教える」ことではなく、「歴史を教える」原点に戻らなくてはならない。教師の歴史教育は年代や歴史知識の記憶にとどまらず、歴史の事象に対する生徒の見方、考え方を育てることに中心を据えなくてはならない。戦争を認識するためには、資料を客観的、多角的に検討する必要もある。そして、国際化時代にふさわしい歴史の教育に向かって、教育現場では、教師が歴史の事実をしっかりと教え、創意、工夫して積極的に国際理解を促進する教育に取り組むことが重要である。戦争を学ぶことは歴史教育の重要な課題だけではなく、国際社会において、アジアの人々と交流する上でも大切なことである。「歴史を鑑として未来に向かう」という言葉があるように、過去の歴史を尊重し、そこから有益な教訓を生かして未来に向かうことは大切である。そして、相手を尊重する態度と姿勢を取りながら協力しあって国際理解教育を強化していくことが、教育の発展の最も大切な要素であると考えてるのである。

<参考文献>

『世界の教科書シリーズ 新版 韓国の歴史 国定韓国高等学校歴史教科書』（2000）明石出版

『中学社会歴史的分野』（2002）大阪書籍

『九年制義務教育八年級教科書 中国歴史』（2002）人民教育出版社

木全清博（1985）『社会認識の発達と歴史教育』、岩崎書店

大谷正（2015）「日清戦争研究の現状と歴史教育」『じっしょう／地歴・公民科資料』、(80)

岩田一彦（1994）『社会科授業研究の理論』、明治図書

余偉民（2002）『歴史教育展望』、華東師範大学出版

張秀蘭 那仁滿都拉（2007）「中日両国の高校歴史教科書の比較研究—日清戦争を中心に」『広島大学大学院教育学研究科紀要』、(56)

中塚明（2002）「市民とすすめる歴史学習—教科書の論点」『歴史地理教育』、(644)

主指導教員（真水康樹教授）、副指導教員（神田豊隆准教授、稲吉晃准教授）